



Informatica® Multidomain MDM
10.3

Data Director 移行ガイド

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、および ActiveVOS は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2019-05-28

目次

序文	5
Informatica のリソース.....	5
Informatica Network.....	5
Informatica ナレッジベース.....	5
Informatica マニュアル.....	6
Informatica 製品可用性マトリックス.....	6
Informatica Velocity.....	6
Informatica Marketplace.....	6
Informatica グローバルカスタマサポート.....	6
 第 1 章 : 概要	7
概要.....	7
ビジネスエンティティのメリット.....	7
 第 2 章 : ビジネスエンティティとサブジェクト領域の比較	9
違いの概要.....	9
データ構造.....	10
設定ツール.....	10
Data Director への影響.....	11
Informatica Data Director のモード.....	12
ビュー.....	13
検索.....	14
 第 3 章 : IDD アプリケーションの移行	15
概要.....	15
前提条件.....	15
ORS と IDD アプリケーションを準備する.....	16
IDD のモードを変更する.....	17
ビジネスエンティティスキーマの生成.....	17
プロビジョニングツールへのログイン.....	18
Data Director のアプリケーションの作成.....	18
生成されたビジネスエンティティスキーマの確認.....	20
スマート検索の有効化.....	21
ホームページの設計.....	21
次の手順.....	23
 第 4 章 : ワークフローアダプタの移行	24
概要.....	24
Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新.....	24
Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定.....	25

タスクの設定.	26
プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定.	26
既存の ActiveVOS タスクの処理.	27
既存の ActiveVOS タスクの処理の概要.	27
移行スクリプトの実行.	27
第 5 章 : トラブルシューティング.	30
トラブルシューティング.	30
第 6 章 : FAQ（よくある質問）.	31
FAQ（よくある質問）.	31
移行の FAQ.	31
IDD モードの FAQ.	32
ActiveVOS の FAQ.	33
付録 A : 用語集.	35
用語解説.	35

序文

Multidomain MDM Data Director の移行ガイドへようこそ。このガイドでは、Informatica Data Director アプリケーションのサブジェクト領域からビジネスエンティティへの移行について順を追って説明します。

Multidomain MDM バージョン 10.0 より前は、Data Director をサブジェクト領域で設定していました。バージョン 10.0 からは、Data Director をビジネスエンティティで設定することを選択できます。このガイドでは、サブジェクト領域とビジネスエンティティの主な違い、サブジェクト領域からビジネスエンティティへのアプリケーションの移行方法、およびワークフローの更新方法について説明します。

このガイドは、MDM 管理者または、Data Director のアプリケーション（IDD アプリケーション）の管理担当者を対象としています。

Informatica のリソース

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica グローバルカスタマサポート、Informatica ナレッジベースなどの製品リソースをホストします。Informatica Network には、<https://network.informatica.com> からアクセスしてください。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- ドキュメント、FAQ、ベストプラクティスなどの製品リソースをナレッジベースで検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

ドキュメント、ハウツー記事、ベストプラクティス、PAM などの製品リソースを Informatica Network で検索するには、Informatica ナレッジベースを使用します。

ナレッジベースには、<https://kb.informatica.com> からアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム（KB_Feedback@informatica.com）です。

Informatica マニュアル

使用している製品の最新のドキュメントを取得するには、
https://kb.informatica.com/_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx にあ
る Informatica ナレッジベースを参照してください。

このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム
(infa_documentation@informatica.com) です。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベ
ースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica Network メンバである場合は、
PAM
(<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) に
アクセスできます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスによって開発されたヒントおよびベスト
プラクティスのコレクションです。数多くのデータ管理プロジェクトの経験から開発された Informatica
Velocity には、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を
行ってきた弊社コンサルタントの知識が集約されています。

Informatica Network メンバである場合は、Informatica Velocity リソース
(<http://velocity.informatica.com>) にアクセスできます。

Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から
Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を強化したり拡張したりするソリューションを検索
できるフォーラムです。Informatica の開発者およびパートナーの何百ものソリューションを利用して、プロ
ジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、
<https://marketplace.informatica.com> からアクセスできます。

Informatica グローバルカスタマサポート

Informatica Network の電話またはオンラインサポートからグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト
(<http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers>) を参
照してください。

Informatica Network メンバである場合は、オンラインサポート (<http://network.informatica.com>) を使用
できます。

第 1 章

概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 7 ページ](#)
- [ビジネスエンティティのメリット, 7 ページ](#)

概要

サブジェクト領域に基づく Informatica Data Director 用のアプリケーション（IDD アプリケーションとも呼ばれます）がある場合にこのガイドを使用します。サブジェクト領域は、個人などの主要エンティティの実装だということを思い出してください。サブジェクト領域は、MDM オペレーショナル参照ストアのベースオブジェクトを編成し、3 レベルのツリー構造でお互いを関連付け、これによりデータを単位としてより容易に管理できるようにになっています。

バージョン 10.0 以降、Data Director は新しくなりました。その取り組みの一環として、データ構造がサブジェクト領域からビジネスエンティティに変更されました。ビジネスエンティティもまた主要エンティティを表しますが、ビジネスエンティティは無制限の深さのツリー構造でベースオブジェクトを編成および関連付けます。ビジネスエンティティは拡張されたユーザーインターフェース、REST API コール、およびビジネスプロセスワークフロー用の ActiveVOS ワークフローエンジンをサポートします。

このガイドを確認し、ビジネスエンティティのデータ構造による利点と違いについて理解してください。ビジネスエンティティへの移行はオプションですが、強くお勧めします。アプリケーションの移行を選択する場合、ビジネスエンティティへの変換およびワークフローの更新の手順に従ってください。

注: サブジェクト領域に広範なカスタマイズとユーザーイグジットが含まれるアプリケーションの場合は、移行を開始する前に、良い点と悪い点について十分考慮してください。

ビジネスエンティティのメリット

ビジネスエンティティにはサブジェクト領域よりも次のようなメリットがあります。

統合ビジネスエンティティサービス

ビジネスエンティティサービスは、MDM Hub コードを実行して、ビジネスエンティティのレコードを作成、更新、削除、検索する一連の操作です。Java コードまたは JavaScript コードを実行してビジネスエンティティサービス呼び出しを実行するカスタムユーザーインターフェースを作成できます。

BE データモデルから直接生成されるビジネスエンティティサービスを使用することで、MDM Hub テーブル構造の複雑さをエンドユーザーから隠すことができます。

構成可能なユーザーインターフェース

標準コンポーネントおよび Twitter フィードなどのカスタムコンポーネントを含めることができるユーザーインターフェースレイアウトを設計できます。ビジネスアナリストは、特定のユーザーロールを対象としたレイアウトを簡単に作成できます。

子レコードをマージする機能

サブジェクト領域では、子レコードをマージできません。ビジネスエンティティでは、同じ子孫レベルにある子レコードをマージできます。

ビジネスエンティティビュー

ビジネスエンティティビューは、ビジネスエンティティの圧縮バージョンです。ビジネスエンティティビューを使用して、既存のプロセスに一致するビューを作成すると、既存のシステムとの統合を簡素化できます。

Data as a Service (DaaS) プロバイダとの統合

サードパーティデータプロバイダからのデータを使用して、ビジネスエンティティデータを拡張できます。DaaS プロバイダと統合し、信頼性があり、正確かつ完全なデータにアクセスできます。

子孫レコードの無制限のネスト

サブジェクト領域には、孫レベルまでの子孫レコードを含めることができます。ビジネスエンティティモデルは、無制限の深さの子孫レコードを持つことができます。

改善されたユーザーインターフェース

エンティティ 360 フレームワーク画面（E360 ビューとも呼ばれる）は、よりクリーンでカラフルに、より直感的になりました。

データ検索の簡素化と強化

ビジネスエンティティの全文検索では、サブジェクト領域のファセット検索よりも高速にデータが取得されます。

第 2 章

ビジネスエンティティとサブジェクト領域の比較

この章では、以下の項目について説明します。

- [違いの概要, 9 ページ](#)
- [データ構造, 10 ページ](#)
- [設定ツール, 10 ページ](#)
- [Data Director への影響, 11 ページ](#)

違いの概要

ビジネスエンティティとサブジェクト領域には、機能の点でいくつかの違いがあります。

次の表に違いを示します。

サブジェクト領域	ビジネスエンティティ
IDD コンフィギュレーションマネージャを使用して構成	プロビジョニングツールを使用して構成
ユーザーイグジット	ユーザーイグジットをサポートしていません。その代わりに、外部サービスを使用し、内部のビジネスエンティティサービスからそれら呼び出します。
マスターデータのインポート	使用不可
データのマスク	ユーザーロールにリンクされたビューを作成し、必要に応じて、機密フィールドを省略または含めることができます。また、Dynamic Data Masking (DDM) が MDM Hub と統合されています。DDM は、ハブコンソールを使用して構成します。
ツリーマージ解除と線形マージ解除	ツリーマージ解除のみ
Jaspersoft レポート	Jaspersoft レポートは、 【ホーム】 ページの唯一のコンポーネントである場合にのみ、 【ホーム】 ページで動作します。

データ構造

ビジネスエンティティのデータ構造は、サブジェクト領域のデータ構造とは異なります。どちらの場合も、データ構造は、個人や場所などの組織にとって重要な主要エンティティを表します。

サブジェクト領域データ構造

サブジェクト領域構造では、データはサブジェクト領域を中心にして整理され、サブジェクト領域グループ内に集約されます。例えば、サブジェクト領域は個人場合があります。Hub Store 内のベースオブジェクト間のリレーションに基づいて、サブジェクト領域内のリレーションを構成します。物理ルックアップベースオブジェクトテーブルのルックアップを構成し、Data Director でメタデータまたは構成ファイルを使用して、ルックアップ値を入力します。サブジェクト領域の構成の詳細については、『*Multidomain MDM Data Director の実装ガイド*』を参照してください。

ビジネスエンティティデータ構造

ビジネスエンティティデータ構造では、データはビジネスエンティティを中心にして整理されます。ビジネスエンティティはノードのツリーであり、各ノードは MDM Hub のベースオブジェクトテーブルに対応します。各フィールドは、MDM Hub のベースオブジェクトテーブルのカラムに対応しています。ビジネスエンティティは、ルートノードに基づいています。ルートノードとビジネスエンティティは同義です。例えば、Person ルートノードのあるビジネスエンティティは、Person ビジネスエンティティとみなされます。

ルートノードが確立されたら、プロビジョニングツールを使用して、親ノードに対して 1 対 1 または 1 対多のリレーションがある子ノードを作成できます。また、プロビジョニングツールを使用して、ルックアップベースオブジェクトに関連付けられているビジネスエンティティとなる参照エンティティを構成することもできます。プロビジョニングツールの詳細については、『*Multidomain MDM のプロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

設定ツール

サブジェクト領域を使用するアプリケーションの場合、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用してアプリケーションを設定します。ビジネスエンティティを使用するアプリケーションの場合、プロビジョニングツールを使用してアプリケーションを設定します。

IDD コンフィギュレーションマネージャ

IDD コンフィギュレーションマネージャは、サブジェクト領域に基づく IDD アプリケーションの追加、変更、および管理に使用される Web ベースのユーティリティです。IDD アプリケーションは、XML 構成ファイル、リソースバンドル、ヘルプファイル、およびその他のコンポーネントで構成されます。これらすべてのコンポーネントを含む ZIP ファイルとして完全な IDD アプリケーションをインポートまたはエクスポートできます。

IDD コンフィギュレーションマネージャは、使用可能なすべての設定オプションを公開しません。カスタムコンポーネントなどの一部の機能を構成するには、ファイルを IDD コンフィギュレーションマネージャにインポートして戻す前に、XML 構成ファイルをエクスポートして直接編集する必要があります。

IDD コンフィギュレーションマネージャの詳細については、『*Multidomain MDM Data Director の実装ガイド*』を参照してください。

プロビジョニングツール

プロビジョニングツールは、ビジネスエンティティと関連する IDD アプリケーションを作成および管理するために使用する Web ベースのユーティリティです。プロビジョニングツールを使用して、ビジネスエンティティモデル、タスク、トランスフォーメーションを定義し、Data Director のユーザーインタフェースを設計できます。

次の項目を定義および設計できます。

- ビジネスエンティティ
- ビジネスエンティティビュー
- 参照エンティティ
- リレーション
- トランスフォーメーション
- タスク設定
- SOAP サービスなどの拡張機能
- ユーザーインターフェースコンポーネント
- ユーザーインターフェースのレイアウト

プロビジョニングツールの詳細については、『*Multidomain MDM のプロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

Data Director への影響

Data Director には、新しいモード、ビュー、および検索機能があります。

Informatica Data Director のモード

Data Director には 3 つのモードがあります。Multidomain MDM ソフトウェアをアップグレードした後も、Data Director は引き続きサブジェクト領域に基づくアプリケーションを表示します。アプリケーションをビジネスエンティティに移行した後で、E360 ビューおよび機能に切り替えることができます。

次の表で、各種モードを説明します。

モード	説明	ユーザーインターフェース
従来のモード	<p>アプリケーションをビジネスエンティティに移行しない場合は、従来のモードを使用します。サブジェクト領域の従来のビューと機能を表示し続けます。</p> <p>引き続き、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用してアプリケーションを管理します。 注: 従来の IDD アプリケーションにワークフローが含まれている場合は、ワークフロータスクを管理するために Data Director の要件としてビジネスエンティティスキーマを生成する必要があります。ただし、サブジェクト領域を使用し続けます。ビジネスエンティティに移行する必要はありません。</p>	<p>従来のモードでは、次のインターフェース要素が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">- サブジェクト領域を使用して 【新規】 ウィンドウを開く 【新規】 タブ- ホームページ- 次の一時インターフェースを含む 【データ】 タブ<ul style="list-style-type: none">- レコードを編集および管理するためのサブジェクト領域レコードビュー- 検索クエリおよび検索クエリ結果を含む 【検索】 タブ- タスクを管理するための 【タスク】 タブ- 他のビューのメニューから 【データ】 ビューへのリンク- カスタムタブ（構成されている場合）
E360 モード	<p>ビジネスエンティティに移行する場合、E360 モードを選択します。ビジネスユーザーはビジネスエンティティの E360 ビューおよび機能を使用できます。</p> <p>移行されたアプリケーションを管理するには、プロビジョニングツールを使用します。 注: E360 モードは、新規顧客のデフォルトのモードです。新規顧客はビジネスエンティティと E360 ビューで開始します。</p>	<p>次のインターフェース要素を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">- ビジネスエンティティを使用して 【新規】 ウィンドウを開く 【新規】 タブ- デザインする 【ホーム】 ページ- タスクを管理するための 【タスクマネージャ】 タブ- 検索結果を含む 【検索】 タブ- ビジネスエンティティレコードを編集および管理するための 【エンティティ】 タブ。 [エンティティ] タブは、新しいビジネスエンティティレコードを追加する、または検索結果からビジネスエンティティレコードを開くと表示されます。タブのラベルは動的で、ワークスペースを開くアクションに基づいて決まります。- 他のビューのメニューから 【ビジネスエンティティ】 ビューへのリンク- カスタムタブ（構成されている場合）
混合モード	<p>ビジネスエンティティへ移行するものの、サブジェクト領域とビジネスエンティティの両方のすべてのビューと機能にアクセスする必要がある場合は、混合モードを使用します。</p> <p>注意: 混合モードでスキーマに変更を加える必要がある場合は、変更を 2 回行う必要があります。1 回目は IDD コンフィギュレーションマネージャで変更を行い、プロビジョニングツールでもう一度行います。混合モードは一時的にのみ使用することをお勧めします。</p>	<p>従来のモードと E360 モードのすべてのインターフェース要素を表示します。</p>

このドキュメントは、E360 モードに移行していることを前提としています。従来のモードまたは混合モードを使用する場合は、移行を開始する前に [「IDD モードの FAQ」](#) (ページ 32) を参照してください。

ビュー

ビジネスエンティティのビュー（E360 ビューと呼ばれます）はサブジェクト領域のビュー（従来のビューと呼ばれます）と似ています。時には、E360 ビューは異なる動作をしたり、いくつかの機能強化を提供します。

注: ビューの比較では、すでに従来のビューの動作に精通していることを前提としています。

次の表では、ビュー間の類似性について説明し、次に E360 ビューの相違点について重点的に説明します。

従来のビュー サブジェクト領域用	E360 ビュー ビジネスエンティティ用	ビュー間の類似性	E360 ビューの相違点
[データ] ビュー	ビジネスエンティティ	どちらのビューにも、選択したビジネスエンティティのマスターデータが表示されます。	ビジネスエンティティビューでは、エンティティの Twitter フィードなどの関連するソーシャル情報を追加できます。また、類似したビジネスエンティティを表示するコンポーネントなどの便利なコンポーネントを追加することもできます。複数のビジネスエンティティビューを構成し、ビューリストにカスタムビューを追加することができます。
[XREF] ビュー	相互参照レコード	どちらのビューにも、ソースシステムのデータを含む相互参照レコードが表示されます。ベストバージョンオブツールズを作成することができます。	[相互参照レコード] ビューには、すべてのレベルの子孫レコードが含まれます。
[一致] ビュー	一致するレコード	どちらのビューにも一致ルールを満たしたレコードが表示されます。	[一致するレコード] ビューでは、ユーザーは子孫レコードを照合してマージできます。ユーザーは、スマート検索を実行して、類似するレコードを検索して追加することもできます。[一致するレコード] ビューの値を手動で上書きすることはできません。
[履歴] ビュー	履歴	どちらのビューにも時系列でデータイベントが表示されます。	E360 バージョンの [履歴] ビューでは、イベントが縦方向の時系列で表示され、データ変更イベントの詳細が右側のパネルに表示されます。
[有効期間] ビュー	タイムライン	どちらのビューにも、タイムラインに沿った有効期間を持つデータイベントに関する情報が表示されます。	なし

従来のビュー サブジェクト領域用	E360 ビュー ビジネスエンティティ用	ビュー間の類似性	E360 ビューの相違点
〔階層〕ビュー	階層	どちらのビューにも、 選択したビジネスエンティティの関係が表示されます。	E360 バージョンの〔階層〕ビューでは、次の操作は許可されません。 <ul style="list-style-type: none"> - 重複するエンティティを検索する。類似するレコードのコンポーネントを持つビジネスエンティティビューを使用するか、一致するレコードを使用します。 - マージを開始する。このタスクには、〔一致するレコード〕ビューを使用します。 - ブックマークの URL を共有する。階層のイメージは引き続き共有できます。
カスタムレコードビュー	なし	カスタムビューがありません。	カスタムレコードビューを作成して標準のビューを置き換えることができます。カスタムビューの名前を IDD アプリケーションのビューリストに追加できます。

検索

サブジェクト領域では、検索クエリを使用してマスタレコードを検索します。ビジネスエンティティでは、スマート検索または検索クエリを使用してマスタレコードを検索します。すべての場合、検索結果はデータフィルタに基づき制限されます。

検索クエリ

検索クエリを作成して、選択したフィールドで指定したフィールド値を検索します。最初に、検索するサブジェクト領域からフィールドを選択します。各フィールドに対して、フィールド内で検索する値を入力します。

スマート検索

検索可能にするフィールドを識別します。IDD アプリケーションでは、ユーザーは〔検索〕ボックスに検索語句を入力できます。検索はビジネスエンティティで検索可能とマークされたフィールドで実行されます。ユーザーロールの権限および選択したビジネスエンティティに基づき、結果にはユーザーがアクセスできるビジネスエンティティからのレコードが含まれます。多くの場合、検索は検索クエリよりも高速です。

第 3 章

IDD アプリケーションの移行

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 15 ページ](#)
- [前提条件, 15 ページ](#)
- [ORS と IDD アプリケーションを準備する, 16 ページ](#)
- [IDD のモードを変更する, 17 ページ](#)
- [ビジネスエンティティスキーマの生成, 17 ページ](#)
- [プロビジョニングツールへのログイン, 18 ページ](#)
- [Data Director のアプリケーションの作成, 18 ページ](#)
- [生成されたビジネスエンティティスキーマの確認, 20 ページ](#)
- [スマート検索の有効化, 21 ページ](#)
- [ホームページの設計, 21 ページ](#)
- [次の手順, 23 ページ](#)

概要

この手順では、ビジネスエンティティデータモデルに移行した後、E360 モードを使用するように IDD アプリケーションを構成することを前提としています。

注: 従来のモードまたは混合モードを使用する場合は、移行を開始する前に [「IDD モードの FAQ」 \(ページ 32\)](#) を参照してください。

開始する前に、前提条件となるソフトウェアが構成されていることを確認します。

前提条件

ビジネスエンティティおよび E360 ビューに移行する前に、スマート検索およびビジネスプロセス管理 (BPM) ワークフローをサポートするようにソフトウェアを構成します。ソフトウェアはインストールまたはアップグ

レードプロセスの一環としてインストールされます。ソフトウェアが正しく構成されていることを確認する必要があります。

次の表に、前提条件となるソフトウェアと、構成手順の場所を示します。

ソフトウェア	説明	手順
Apache Solr と Apache ZooKeeper	MDM Hub は、Apache Solr を使用して、マスターデータ内の選択されたフィールドでスマート検索、つまり全文検索を実行します。 Apache Solr は、オープンソースのエンタープライズ検索アプリケーションです。 SolrCloud は、Solr サーバーのクラスタを使用して分散インデックス処理および検索を可能にします。ZooKeeper は、複数の Apache Solr サーバーにまたがる検索を同期する一元的なサービスです。	スマート検索の設定の詳細については、 <i>Multidomain MDM の設定ガイド</i> を参照してください。
ActiveVOS	BE データモデルで BPM ワークフローを使用する場合に必要です。 MDM Hub は、ActiveVOS を使用して BPM ワークフローを実行し、レビュータスクを作成します。アップグレードするときに、ハブサーバーアップグレードプロセスの一環として ActiveVOS をインストールし、MDM Hub コンソールでワークフローエンジンとして BE ActiveVOS ワークフローアダプタを選択します。	ActiveVOS のインストールと構成の詳細については、該当する <i>Multidomain MDM のアップグレードガイド</i> または <i>Multidomain MDM のインストールガイド</i> を参照してください。

ORS と IDD アプリケーションを準備する

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）と IDD アプリケーションがビジネスエンティティの要件を満たしていることを確認します。

次の表に要件を示します。

影響する領域	要件	説明
階層エンティティベースオブジェクト	外部キーリレーションが CODE カラムにマップされていること	外部キーが別のタイプのカラムにマップされている場合は、それを CODE カラムに再マップします。
サブジェクト領域名	名前にアンダースコアやその他の特殊文字がないこと	一部のサブジェクト領域名にアンダースコア文字または特殊文字が含まれている場合は、サブジェクト領域の名前を変更してアンダースコアを削除します。
検証	サブジェクト領域に基づく IDD アプリケーションは有効である必要があります。	IDD コンフィギュレーションマネージャで、IDD アプリケーションを検証し、エラーを解決します。

IDD のモードを変更する

Multidomain MDM ソフトウェアのアップグレード後、サブジェクト領域に基づく IDD アプリケーションを開くと、デフォルトでは従来のビューと検索クエリ機能が表示されます。移行後、E360 モードを有効にして、E360 ビューとスマート検索ボックスを表示できます。

IDD のモードを変更するには、MDM Hub サーバーのプロパティファイルとプロセスサーバーのプロパティファイルでプロパティを設定します。

1. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory>/hub/server/resources
2. cmxserver.properties ファイルを開きます。
3. 移行した IDD アプリケーションで表示するビューを反映するようにプロパティを設定します。

次の表に、プロパティと移行前と後の設定を示します。

プロパティ	移行前 = 従来のモード	移行後 = E360 モード
cmx.dataview.enabled	true	false
cmx.e360.view.enabled	false	true
cmx.e360.match_xref.view.enabled	false	true
cmx.ss.enabled	false	true

4. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory>/hub/cleanse/resources
5. cmxcleanse.properties ファイルを開きます。
6. [3](#) で設定した値と一致するように cmx.ss.enabled プロパティを設定します。
7. プロパティファイルに変更を保存した後、アプリケーションサーバーを再起動します。

ビジネスエンティティスキーマの生成

ビジネスエンティティスキーマを生成するには、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用します。

生成プロセス中に、MDM Hub は次の移行を実行します。

- サブジェクト領域ごとにビジネスエンティティを作成する
- ルックアップを参照エンティティに変換する
- リレーションを移行する

このプロセスにより、ビジネスエンティティスキーマが C_REPOS_CO_CS_CONFIG リポジトリテーブルに保存されます。

1. IDD コンフィギュレーションマネージャにログインします。
2. 移行するアプリケーションを選択します。

3. **【アプリケーション】** 画面で、**【ビジネスエンティティスキーマの生成】** をクリックします。
スキーマが作成されたことを通知するメッセージが表示されます。生成されたスキーマは、プロビジョニングツールで表示できます。

プロビジョニングツールへのログイン

スキーマを表示および強化するには、プロビジョニングツールを使用します。

1. 新しいブラウザタブを開き、IDD コンフィギュレーションマネージャで使用するのと同じ IP アドレスとポート番号を使用します。

<IP address>:<port>/provisioning/

2. IDD コンフィギュレーションマネージャで使用するのと同じユーザー資格情報を入力します。

Data Director のアプリケーションの作成

各オペレーショナルリファレンスストア（ORS）データベースには、1 つのアプリケーションを含めることができます。プロビジョニングツールで、レガシーアプリケーションと同じ ORS に基づいてアプリケーションを作成します。便宜上、レガシーアプリケーションと同じ名前を付けることもできます。

注: 混合モードの使用を予定している場合は、E360 アプリケーション名がレガシーアプリケーション名と同じであることを確認する必要があります。

1. プロビジョニングツールの **【データベース】** リストから、アプリケーションを関連付けるデータベースを選択します。
2. **【設定】** > **【アプリケーションエディタ】** をクリックします。
【アプリケーション】 ページが表示されます。
3. **【作成】** をクリックします。
4. **【アプリケーションのプロパティ】** パネルで以下のプロパティを指定します。

プロパティ	説明
名前	【アプリケーション】 パネルに表示されるアプリケーションの名前。
表示名	Data Director に表示されるアプリケーションの名前。
ソースシステム	アプリケーションを関連付けるソースシステム。
セッションタイムアウト（分）	アイドル状態の Data Director セッションがタイムアウトするまでに待機する分単位の時間。
デフォルトのレコードビューを表示	デフォルトのレコードビューを有効にします。デフォルトのレコードビューの名前が Data Director の 【ビュー】 リストに表示されます。

プロパティ	説明
スマート検索	Data Director のナビゲーションバーで 【検索】 メニューオプションを有効にします。
クエリ	Data Director のナビゲーションバーで 【クエリ】 メニューオプションを有効にします。
アプリケーションでのクエリダイアログ	<p>【スマート検索】 および 【クエリ】 オプションの両方を有効にした場合は、このオプションが表示されます。</p> <p>【一致したレコード】 などのレコードビュー内のレコードを検索する場合や 【関連レコード】 などのコンポーネントを使用する場合に、クエリの使用を許可するには、【アプリケーションでのクエリダイアログ】 オプションを有効にします。デフォルトでは、検索メニューオプションは有効になっています。</p> <p>注: 【クエリ】 と 【検索】 メニューオプションの両方が Data Director のナビゲーションバーに表示されます。</p>

5. **【適用】** をクリックします。
アプリケーションのプロパティは、一時ワークスペースに保存されます。
6. 検索またはクエリの結果を表示するには、使用するビジネスエンティティビューを設定します。
注: Apache Solr 検索エンジンを使用する場合は、このステップをスキップします。
 - a. **【ツリービュー】** パネルで、**【検索構成】** ノードをクリックします。
 - b. **【アプリケーションのプロパティ】** パネルで、各ビジネスエンティティに検索またはクエリ結果用のビジネスエンティティビューを選択します。
ビジネスエンティティビューを選択しないと、検索またはクエリ結果にはビジネスエンティティ全体が含まれます。
 - c. **【適用】** をクリックします。
検索またはクエリ結果の設定は一時的なワークスペースに保存されます。
7. 必要に応じて、アプリケーション内のビジネスエンティティを設定するには、**【ツリービュー】** パネルで **【ビジネスエンティティ】** ノードをクリックします。
 - a. アプリケーション内のビジネスエンティティの設定を作成するには、**【作成】** をクリックします。
 - b. **【プロパティ】** パネルで、設定するビジネスエンティティを選択し、次のビジネスエンティティのプロパティを指定します。

プロパティ	説明
表示可能	ユーザーがレコードを作成するときに、 【新規】 タブでビジネスエンティティを表示するかどうかを指定します。

8. **【適用】** をクリックします。
作成したアプリケーションが **【ツリービュー】** パネルと **【アプリケーション】** パネルに表示されます。
9. 変更内容を MDM Hub にパブリッシュします。
 - a. **【パブリッシュ】** をクリックします。
変更の確認ダイアログボックスが表示され、変更内容を確認するように求められます。
 - b. 変更内容を確認し、**【確認】** をクリックします。

アプリケーションで検証プロセスが実行されます。確認ダイアログボックスが表示され、変更内容をパブリッシュするように求められます。

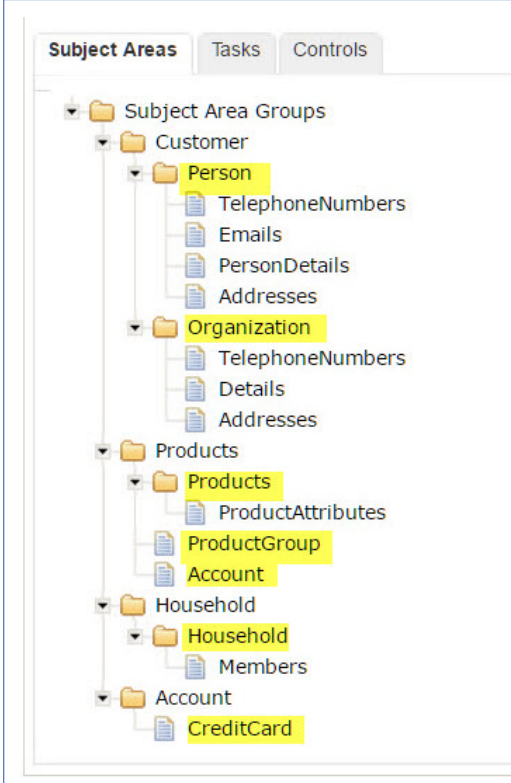
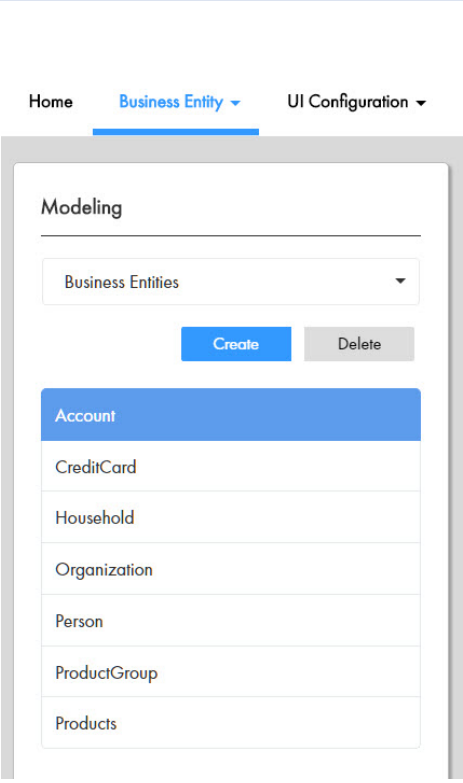
- c. 次のいずれかのボタンをクリックします。
- **【パブリッシュ】**。変更内容を MDM Hub に保存します。
 - **【いいえ】**。変更内容は一時ワークスペースに残ります。

生成されたビジネスエンティティスキーマの確認

プロビジョニングツールを使用して、ユーザーフレンドリなインターフェースでスキーマを表示および強化します。

1. プロビジョニングツールで、データベース用に E360 アプリケーションを選択します。
2. **【ビジネスエンティティ】** > **【モデリング】** をクリックします。
3. ドロップダウンリストから **【ビジネスエンティティ】** を選択します。

次の画像は、サブジェクト領域の元の一覧と、生成されたビジネスエンティティモデルの一覧を示しています。

IDD コンフィギュレーションマネージャのサブジェクト領域	プロビジョニングツールのビジネスエンティティモデル
	

4. ルックアップを表示するには、ドロップダウンリストから **【参照エンティティ】** を選択します。
5. リレーションを表示するには、ドロップダウンリストから **【リレーション】** を選択します。

スマート検索の有効化

スマート検索を有効にするには、ビジネスエンティティを開き、検索可能にするフィールドを選択します。完了したら、MDM Hub コンソールから **【スマート検索データの初期インデックス処理】** バッチジョブを実行します。

注意: rowidObject フィールドは検索可能にマークしないでください。ビジネスエンティティデータモデルでは、rowidObject フィールドの検索はサポートされていません。

すべてのビジネスエンティティでバッチジョブを実行します。

1. プロビジョニングツールで、**【ビジネスエンティティ】** > **【モデリング】** をクリックし、**【ビジネスエンティティ】** を選択します。
2. ビジネスエンティティをクリックします。
ビジネスエンティティが開きます。
3. **【ビジネスエンティティ】** パネルで、**【フィールド】** フォルダを展開します。
すべてのフィールドが表示されます。
4. 検索可能にするフィールドごとに、フィールドを選択し、**【プロパティ】** パネルで **【検索可能】** をクリックします。
5. ビジネスエンティティモデルで検索可能フィールドを特定したら、**【パブリッシュ】** をクリックします。
注目: 検索可能フィールドをデータベースにパブリッシュする必要があります。変更をパブリッシュしないと、インデックスを作成するための検索可能なフィールドがないため、次の手順が失敗します。
6. MDM Hub コンソールで、検索可能なフィールドを含むビジネスエンティティモデルに対して、**【スマート検索データの初期インデックス処理】** バッチジョブを実行します。
 - a. ハブコンソールにログインし、オペレーショナルリファレンスストアデータベースを選択します。
 - b. **【ユーティリティ】** ワークベンチで、**【バッチビューア】** をクリックします。
 - c. **【プロセスタイプでグループ化】** を選択します。
 - d. **【スマート検索データの初期インデックス処理】** を見つけます。
 - e. 各ビジネスエンティティモデルを選択し、**【バッチの実行】** をクリックします。
インデックスバッチジョブが実行されます。

ヒント: または、バッチグループを作成し、インデックスを作成するビジネスエンティティモデルにすべてのインデックスジョブを追加してから、バッチグループを実行することもできます。

ホームページの設計

レイアウトデザイナーを使用して、ビジネスエンティティを使用する IDD アプリケーションの **【ホーム】** ページを設計できます。**【ホーム】** ページで、タスクインボックス、グラフ、ソーシャルメディアフィード、およびその他の外部リソースなどのコンポーネントを追加します。

場合によっては、それらを **【ホーム】** ページに追加する前にコンポーネントを設計する必要があります。コンポーネントとレイアウトの詳細については、*Multidomain MDM のプロビジョニングツールガイド* を参照してください。

1. プロビジョニングツールで、**【設定】** > **【レイアウトデザイナー】** をクリックします。
レイアウトデザイナーが表示されます。
2. **【作成】** > **【ホームページのレイアウト】** をクリックします。

【プロパティ】 ページが表示されます。

3. 以下のプロパティを指定します。

プロパティ	説明
レイアウト名	設計するレイアウトのラベル。レイアウトを設計してパブリッシュすると、レイアウト名が【レイアウトカテゴリ】 パネルに表示されます。
レイアウト ID	システム ID を生成するために使用されるラベル。
説明	オプション。レイアウトを識別するためのわかりやすい説明。

4. 【次へ】 をクリックします。

【ユーザーロール】 ページが表示されます。

5. 【ホーム】 ページにアクセスできるユーザーロールを選択します。

【ユーザーロール】 ページに表示されるユーザーロールは、MDM Hub で設定します。

6. 【次へ】 をクリックします。

【テンプレート】 ページが表示されます。

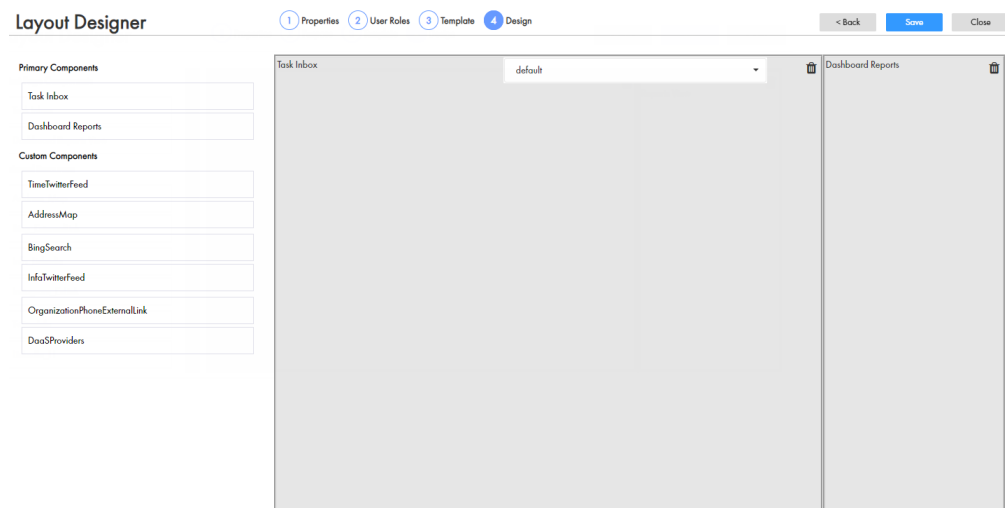
7. 【ホーム】 ページに対するユーザー設定をサポートするテンプレートを選択して、【次へ】 をクリックします。

【デザイン】 ページが表示されます。

8. 【ホーム】 ページのレイアウトに必要なコンポーネントをワークスペース内にドラッグします。

例えば、【タスクインボックス】 コンポーネントと 【ダッシュボードレポート】 コンポーネントをワークスペースにドラッグします。

次の図は、ワークスペースに 【タスクインボックス】 コンポーネントと 【ダッシュボードレポート】 コンポーネントがある 【デザイン】 ページです。



9. 【保存】 をクリックします。

変更内容は、一時ワークスペースに保存されます。

10. 変更内容を MDM Hub にパブリッシュします。
 - a. **【パブリッシュ】** をクリックします。

変更の確認ダイアログボックスが表示され、変更内容を確認するように求められます。
 - b. 変更内容を確認し、**【確認】** をクリックします。

アプリケーションで検証プロセスが実行されます。確認ダイアログボックスが表示され、変更内容をパブリッシュするように求められます。
 - c. 次のいずれかのボタンをクリックします。
 - **【パブリッシュ】**。変更内容を MDM Hub に保存します。
 - **【いいえ】**。変更内容は一時ワークスペースに残ります。

次の手順

BPM ワークフローとタスクを実装する場合、最後の必須ステップとして、ActiveVOS ワークフローアダプタを設定し、タスクトリガを定義し、既存のタスクを処理します。次のセクションを参照してください。

将来的には、プロビジョニングツールを使用してアプリケーションを更新およびカスタマイズします。

E360 アプリケーションは、次の方法でカスタマイズできます。

- エンティティビューのコンポーネントとレイアウトをデザインする
- クレンジングトランスフォーメーションを構成する
- フィールドのサブセットを含むビジネスエンティティビューを作成する
- 新しいビジネスエンティティモデルを作成する
- サードパーティのデータプロバイダなどのサービスの拡張機能を追加する

E360 アプリケーションのカスタマイズの詳細については、*Multidomain MDM のプロビジョニングツールガイド*を参照してください。

IDD コンフィギュレーションマネージャの機能がプロビジョニングツールにどのようにマップされているかの詳細については、[「移行の FAQ」 \(ページ 31\)](#)を参照してください。

第 4 章

ワークフローアダプタの移行

この章では、以下の項目について説明します。

- [概要, 24 ページ](#)
- [Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新, 24 ページ](#)
- [Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定, 25 ページ](#)
- [タスクの設定, 26 ページ](#)
- [プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定, 26 ページ](#)
- [既存の ActiveVOS タスクの処理, 27 ページ](#)

概要

アプリケーションをビジネスエンティティに移行する場合、Siperian または SA ActiveVOS ワークフローアダプタから BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行する必要があります。

BE ActiveVOS ワークフローアダプタは、BE ActiveVOS ワークフローを使用します。BE ActiveVOS ワークフローは、ビジネスエンティティで動作します。[一致するレコード] ビューなどの一部の画面では、子エンティティのマージをサポートするために BE ActiveVOS ワークフローが必要です。

MDM Hub は、プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタをサポートしています。セカンダリアダプタを使用すると、BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行するときに、古いワークフローアダプタを使用して既存のタスクを処理できます。ワークフローアダプタを移行するときは、BE ActiveVOS ワークフローアダプタをプライマリアダプタとして設定します。

Data Director は、タスクを処理するための適切な画面を起動します。例えば、マージ解除タスクが移行前に作成されていると、そのタスクが処理される際に、従来の [XREF] ビューが起動されます。

Siperian ワークフローアダプタの IDD 構成の更新

タスクマネージャで Siperian ワークフローアダプタタスクを表示するには、Informatica Data Director 構成ファイルのタスク設定を更新します。

1. Siperian BPM タスクタイプ設定を更新します。
 - `defaultApproval="true"`を `defaultApproval="false"`に変更します。
 - `creationType` を `NONE` に設定します。

2. ActiveVOS タスクのタスク設定を追加します。
次のコードサンプルは、Informatica Data Director 構成ファイルでのビジネスエンティティベースの ActiveVOS タスクの設定方法を示しています。

```
<tasks includeUnassignedTasks="true">
  <!-- Task Definitions -->
  <taskType taskTypeId="BeMergeTask" name="AVOSBeMerge" displayName="Merge"
    creationType="MERGE" displayType="MERGE">
    <description>Merge two records together.</description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeUnmergeTask" name="AVOSBeUnmerge"
    displayName="Unmerge" creationType="UNMERGE" displayType="UNMERGE">
    <description>Unmerge an XREF record from a Base Object record.
    </description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeOneStepApprovalTask" name="AVOSBeFinalReview" displayType="NORMAL"
    displayName="Final review" creationType="NONE" pendingBVT="true">
    <description>Update a record and require the user to go through an
    approval process before completing the task.
    </description>
  </taskType>

  <taskType name="AVOSBeNotification" displayName="Notification"
    creationType="NONE" displayType="NORMAL">
    <description>Notification step in the workflow</description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeTwoStepApprovalTask" name="AVOSBeReviewNoApprove" displayType="NORMAL"
    displayName="Review no approve" creationType="NONE" defaultApproval="true" pendingBVT="true">
    <description>Update a record and require the user to go through an
    approval process before completing the task.
    </description>
  </taskType>

  <taskType taskTypeId="BeUpdateWithApprovalTask" name="AVOSBeUpdate"
    displayName="Update" creationType="CREATE" pendingBVT="true" displayType="NORMAL">
    <description>Update a record and do not require the user to go through an approval
    process before completing the task. The approval step is optional.
    </description>
  </taskType>
</tasks>
```

Siperian ワークフローアダプタのタスクの割り当ての設定

ビジネスエンティティに基づく ActiveVOS ワークフローアダプタへのタスクの割り当てを設定するには、IDD コンフィギュレーションマネージャを使用してサブジェクト領域ごとにタスクの割り当てを設定します。タスクを直接割り当てることも、タスクマネージャによってタスクがユーザーに割り当てられるようにすることも可能です。

1. Informatica Data Director コンフィギュレーションマネージャにログインします。
`http://[host]:[port]/bdd/config/`
2. 更新するアプリケーションを選択します。
3. **【編集】** をクリックします。
4. **【サブジェクト領域】** タブでサブジェクト領域を選択して、**【サブジェクト領域の編集】** をクリックします。

5. **【タスクの割り当て】** タブをクリックし、**【追加】** をクリックします。
6. **【タスクの割り当て】** ダイアログボックスで、タスクのリストから設定するタスクを選択します。
7. タスクの割り当てが可能なロールとユーザーを選択します。**【OK】** をクリックします。
8. **【保存】** をクリックします。
9. **【ビジネスエンティティスキーマの生成】** をクリックします。コンフィギュレーションマネージャによって、ビジネスエンティティとビジネスエンティティサービスの設定が生成されます。
10. MDM Hub で、リポジトリマネージャを使用してオペレーショナル参照ストアを検証します。リポジトリマネージャの検証によって、アプリケーションサーバーにキャッシュされているリポジトリデータがリフレッシュされます。

タスクの設定

BE ActiveVOS ワークフローアダプタに切り替える場合は、プロビジョニングツールを使用して、BE ActiveVOS ワークフローを使用するようにタスクを設定します。

プロビジョニングツールで、次のタスクプロパティを設定できます。

タスクテンプレートの設定

特定のプロパティを使用してタスクが作成されるように、タスクテンプレートを設定できます。例えば、トリガがワークフローを起動したときに、タスクに特定のタイトル、優先度、期限、およびタスクステータスが設定されるように指定できます。

ワークフロートリガの設定

Data Director の特定のイベント後に適切な ActiveVOS^(R) ワークフローが起動されるように、ワークフロートリガを設定します。ワークフローがトリガされるときに、ユーザーによるコメントまたは添付ファイルの追加を必須とするかどうかを設定できます。

タスクタイプの設定

特定のユーザーロールがタスクを引き受けることができる、つまりタスクの割り当て対象となるように、タスクタイプを設定できます。タスクタイプごとに、タスクアクション設定を作成できます。タスクアクションを実行する際に、コメントの追加、ファイルの添付、またはタスクの再割り当てを行う必要があるかどうかを設定できます。

プライマリワークフローアダプタとセカンダリワークフローアダプタの設定

BE ActiveVOS ワークフローアダプタに移行するには、BE ActiveVOS ワークフローエンジンをプライマリワークフローエンジンとして選択します。ビジネスエンティティのワークフローアダプタの名前は、BE ActiveVOS です。既存のタスクをセカンダリワークフローエンジンで処理することはできませんが、タスクを作成することはできません。プライマリとセカンダリに同じワークフローエンジンを選択しないでください。

ActiveVOS を搭載した Multidomain MDM を今まで使用したことがない場合、プライマリワークフローアダプタとして BE ActiveVOS アダプタを選択します。既存タスクを処理するのにセカンダリワークフローアダプタを選択する必要はありません。

注: Data Director アプリケーションがサブジェクト領域を使用する場合は、プライマリワークフローエンジンとして Informatica ActiveVOS アダプタの使用を継続します。

ワークフローエンジンを追加すると、これがプライマリワークフローエンジンになり、既存のプライマリワークフローエンジンはセカンダリワークフローエンジンになります。既存のセカンダリワークフローエンジンがある場合、これはオペレーショナル参照ストアから削除され、そのタスクがタスクインボックスから削除されます。

1. **【設定】** ワークベンチで、**[Workflow Manager]** をクリックします。
2. 書き込みロックを取得します。
3. **【ワークフローエンジン】** タブを選択し、次の BE ActiveVOS ワークフローアダプタ情報が正確であることを確認します。
 - ActiveVOS サーバーホスト
 - ActiveVOS サーバーポート
 - 信頼できるユーザーのユーザー名
 - 信頼できるユーザーのパスワード
 - MDM Hub と ActiveVOS サーバーとの間の通信のプロトコル
4. **【オペレーショナルリファレンスストアのワークフローマッピング】** タブを選択します。
タブのテーブルでは、Hub ストア内のすべてのオペレーショナル参照ストアデータベースが含まれています。
5. **【プライマリワークフローエンジン】** カラムで、BE ActiveVOS ワークフローアダプタのワークフローエンジンを選択します。
6. **【セカンダリワークフローエンジン】** カラムで、ワークフローエンジンを選択します。

既存の ActiveVOS タスクの処理

既存の ActiveVOS タスクの処理の概要

Multidomain MDM バージョン 10.1 より前に作成された ActiveVOS タスクを使用するには、移行スクリプトを実行して必要なプレゼンテーションパラメータをタスクに入力します。移行スクリプトを実行しないと、タスクがタスクマネージャに表示されません。バージョン 10.1 にアップグレードする前に作成されたすべてのタスクが処理されるまで、移行スクリプトを実行します。

移行スクリプトには、いくつかのプロパティを設定する必要があります。プロパティは、ビルドファイルに追加することも、コマンドラインに追加することもできます。

移行スクリプトの実行

Multidomain MDM バージョン 10.1 より前に作成された ActiveVOS タスクを使用するには、移行スクリプトを実行して必要なプレゼンテーションパラメータをタスクに入力します。移行スクリプトを実行しないと、タ

スクがタスクマネージャに表示されません。すべてのタスクが完了するまで、スクリプトを定期的に行ってください。

注: スクリプトを実行するには、プロパティファイルを使用できます。プロパティファイルにパスワードを格納しない場合は、コマンドでプロパティを使用してスクリプトを実行できます。

1. タスク管理に関連するすべてのロールに属する MDM Hub ユーザーを作成します。すぐに利用できるロールは DataSteward、Manager、および SrManager です。

ActiveVOS 移行ユーティリティでは、すべてのタスク管理ロールに属するユーザーを作成する必要があります。

注: 移行後、タスクは、アップグレード前に割り当てられていたのと同じユーザーに割り当てられます。ファイルのプロパティまたはコマンドラインのプロパティを使用してスクリプトを実行できます。

2. プロパティファイルを使用してスクリプトを実行するには、次の手順を実行します。
 - a. テキストエディタで次のファイルを開きます。
MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin\build.properties
 - b. 次のプロパティを build.properties ファイルに追加します。

プロパティ	説明
avos.jdbc.database.driver.jar	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバが含まれる JAR ファイルへのパス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.driver.class	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバクラス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.url	ActiveVOS データベースの接続 URL。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.username	ActiveVOS データベースのユーザー名。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に <infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.password	ActiveVOS データベースのパスワード。
avos.ws.protocol	ActiveVOS サーバー接続のプロトコル。http または https になります。
avos.ws.host	ActiveVOS が実行されるアプリケーションサーバーのホスト名。
avos.ws.port	アプリケーションサーバー接続のポート番号。

プロパティ	説明
avos.ws.trusted.username	信頼されたユーザーのユーザー名。 注: 信頼されたユーザーは、Multidomain MDM のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.ws.trusted.password	信頼されたユーザーのパスワード。 注: 信頼されたユーザーは、Multidomain MDM のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.hub.username	タスク管理に関連するすべてのロールに属する MDM Hub ユーザーです。すぐに利用できるロールは DataSteward、Manager、および SrManager です。
avos.ws.pagesize	1 つのデータベーストランザクションで処理され、ActiveVOS からバッチロードされるタスクの数。
avos.ws.statuses	オプション。処理する ActiveVOS タスクステータスのカンマ区切りリスト。例えば、READY や IN_PROGRESS などです。デフォルトではすべてのタスクが処理されます。

- c. コマンドプロンプトを開きます。
 - d. 次のディレクトリに移動します。
 <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
 - e. 次のコマンドを使って MDM Hub マスターデータベースのアップグレードスクリプトを実行します。
 - UNIX の場合: sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks
 - Windows の場合: sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks
3. コマンドラインでプロパティファイルを指定してスクリプトを実行するには、次の手順を実行します。
- a. コマンドプロンプトを開きます。
 - b. 次のディレクトリに移動します。
 <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
 - c. コマンドでプロパティを指定して MDM Hub マスターデータベースアップグレードスクリプトを実行します。例えば、次のコマンドを実行できます。
 - UNIX の場合:


```
sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!!  
-Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100  
-Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
```
 - Windows の場合:


```
sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!!  
-Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100  
-Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
```
4. スクリプトは定期的に行います。
5. サブジェクト領域ワークフローアダプタのすべてのタスクが処理されたら、スクリプトを実行する必要はなくなり、ユーザーを削除できます。

第 5 章

トラブルシューティング

- [トラブルシューティング, 30 ページ](#)

トラブルシューティング

IDD の SA データモデルから IDD の BE データモデルに移行する際に問題に直面した場合は、次の情報を使用して問題のトラブルシューティングを行います。

IDD の構成が無効

ビジネスエンティティスキーマを生成する場合、階層マネージャのエンティティベースオブジェクトで、階層マネージャが有効になっているビジネスエンティティのリレーションが正しく変換されない場合があります。

この問題を解決するには、IDD コンフィギュレーションマネージャで、階層マネージャのエンティティベースオブジェクトを使用してサブジェクト領域を編集します。数値のサブタイプ値は、無効な IDD 構成を示します。**[HM エンティティタイプ]** フィールドで、別のエンティティタイプを選択し、**[サブタイプの値]** フィールドの値が数値以外の値に変わるまで、元のエンティティタイプを再度選択します。

スマート検索が機能しない

次の手順をすべて実行したことを確認します。

1. ハブコンソールで、スマート検索と ZooKeeper を設定します。1 つのプロセスサーバーを ZooKeeper のサーバーとして構成します。
2. cmxserver.properties ファイルと cmxcleanse.properties ファイルの両方で cmx.ss.enabled=true を設定します。
3. IBM WebSphere を使用している場合は cmxcleanse.properties ファイルで pingSolrOnStartup=true を設定します。
4. E360 アプリケーションで、ビジネスエンティティモデルでフィールドを検索可能としてマークします。
5. 検索可能なフィールドを使用してスキーマをパブリッシュします。
6. MDM Hub コンソールから、すべてのビジネスエンティティに対して検索インデックスバッチジョブを実行します。

従来のタスクはビジネスエンティティを従来のビューで開くが、従来のビューをオフにしました。

このタスクは、従来の IDD アプリケーションから移行されました。タスクからエンティティを開くと、エンティティは編集されたビューで開かれます。従来のタスクをすべて閉じると、従来のビューは今後使用されなくなります。

第 6 章

FAQ（よくある質問）

- [FAQ（よくある質問）, 31 ページ](#)

FAQ（よくある質問）

ここでは、BE データモデルへの IDD アプリケーションの移行についてよく寄せられる質問のリストを示します。

リストは次のカテゴリに分類されています。

- [「移行の FAQ」 \(ページ 31\)](#)
- [「IDD モードの FAQ」 \(ページ 32\)](#)
- [「ActiveVOS の FAQ」 \(ページ 33\)](#)

移行の FAQ

ビジネスエンティティへのアップグレードは必須ですか？

いいえ。Informatica では、Data Director でビジネスエンティティを使用することを推奨していますが、サブジェクト領域を使用するお客様も引き続きサポートします。ただし、作業するタスクのビジネスエンティティスキーマを生成する必要があります。

さらに、ビジネスエンティティに移行した後は、サブジェクト領域だけを使用しないことをお勧めします。データスチュワードの間で混乱を招く可能性があり、データへの変更が失われる可能性があります。

ビジネスエンティティでもユーザーイグジットを使用できますか？

いいえ。ユーザーイグジットはビジネスエンティティでは機能しません。ただし、外部呼び出しを作成して、ユーザーイグジットの一部の機能を置き換えることができます。

ビジネスエンティティでタスクインボックスを使用できますか？

はい。タスクインボックスを使用できます。タスクインボックスは [タスクマネージャ] にあり、[ホーム] ページに追加することもできます。タスクインボックスには、ActiveVOS がインストールおよび構成されている必要があります。

ビジネスエンティティに移行する場合の欠点がありますか？

いくつかの機能が失われます。例えば、Raw データをシステムにインポートしてエクスポートするのがより困難です。しかし、ビジネスエンティティには、他システムとの統合や設定可能なページおよびビューなどの、複数のメリットがあります。詳細については、[「ビジネスエンティティのメリット」 \(ページ 7\)](#)および [「違いの概要」 \(ページ 9\)](#)を参照してください。

リポジトリマネージャの変更リストには、ビジネスエンティティに関する情報が含まれていますか？

はい。ハブコンソールでリポジトリマネージャから変更リストをエクスポートすると、変更リストにはすべてのビジネスエンティティの詳細が含まれます。リポジトリマネージャから変更リストをインポートすることもできます。

ビジネスエンティティとともに ActiveVOS を使用する必要はありますか？

はい。ActiveVOS はビジネスエンティティで唯一サポートされている BPM エンジンです。

プロビジョニングツールの使用方法を教えてください。

次の表で、IDD コンフィギュレーションマネージャの一般的な構成と、プロビジョニングツールにおけるそれに相当するものについて説明します。

構成方法	IDD コンフィギュレーションマネージャ	プロビジョニングツール
サブジェクト領域/ ビジネス エンティ ティ	<ol style="list-style-type: none">1. IDD アプリケーションを選択します。2. [サブジェクト領域] タブで、[サブジェクト領域の追加] をクリックします。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [ビジネスエンティティ] を選択します。
ルックアップ/参照 エンティ ティ	<ol style="list-style-type: none">1. ハブコンソールで、スキーママネージャを使用して、ベースオブジェクトをルックアップベースオブジェクトとして構成します。2. ベースオブジェクトとルックアップベースオブジェクトの間に外部キーリレーションを作成します。3. IDD では、この外部キーリレーションに関するメタデータを使用してルックアップ値が入力されます。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [参照エンティティ] を選択します。
リレーシ ョン	<ol style="list-style-type: none">1. ハブコンソールで、スキーママネージャを使用して、ベースオブジェクト間のリレーションを構成します。2. IDD では、関連付けられたベースオブジェクト間のリレーションに基づいて、サブジェクト領域内にリレーションが作成されます。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [モデリング] をクリックします。2. [リレーション] を選択します。
タスク	<ol style="list-style-type: none">1. IDD アプリケーションを選択します。2. [タスク] タブで、[追加] をクリックします。	<ol style="list-style-type: none">1. [ビジネスエンティティ] > [タスク] をクリックします。2. タスクテンプレート、タスクタイプ、およびトリガを定義できます。

IDD モードの FAQ

アップグレード後、引き続き従来のビューだけを表示することはできますか？

はい。アプリケーションをビジネスエンティティに移行する必要はありません。

アップグレード後、アプリケーションに BPM ワークフローが含まれていない場合は、このガイドの手順を実行する必要はありません。

アプリケーションに BPM ワークフローが含まれている場合は、ビジネスエンティティスキーマを生成する必要があります。Data Director には、スキーマが存在する必要があります。同じワークフローエンジンを引き続き使用できます。IDD モードを変更したり、プロビジョニングツールを使用する必要はありません。

注: このモードでは、ビジネスエンティティに基づく機能とビューは使用できません。

サブジェクト領域、従来のビュー、およびワークフローエンジンを引き続き使用するには、ビジネスエンティティスキーマを生成します。

1. [「ORS と IDD アプリケーションを準備する」](#) (ページ 16)
2. [「ビジネスエンティティスキーマの生成」](#) (ページ 17)

従来のビューと E360 ビューを同時に表示することはできますか？

はい。両方のビューのセットを表示することができます。これを混合モードと呼びます。例えば、[ホーム] ページとレコードビューのレイアウトをデザインする間、一時的に混合モードを使用することができます。

注意: 混合モードでは、スキーマに変更を加える必要がある場合、変更を 2 回行う必要があります。1 回目は IDD コンフィギュレーションマネージャで変更を行い、プロビジョニングツールでもう一度行います。IDD コンフィギュレーションマネージャからスキーマを再生成し、変更をプロビジョニングツールでパブリッシュすると、移行した要素に対して行ったカスタマイズが上書きされます。サブジェクト領域とは異なる名前を持つビジネスエンティティモデルなどの新しい要素は、上書きされないため保持されます。

混合モードを使用するには、このドキュメントのすべての手順を実行します。モードを変更する場合は、次の設定を使用します。

プロパティ	混合モード
cmx.dataview.enabled	true
cmx.e360.view.enabled	true
cmx.e360.match_xref.view.enabled	true
cmx.ss.enabled	true

プロビジョニングツールでは、従来の IDD アプリケーションと同じ名前のアプリケーションを作成する必要があります。

ActiveVOS の FAQ

サブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合、マージおよびマージ解除のタスクを作成するにはどのビューを使用したらよいですか？

サブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合は、従来の [一致] ビューと [XREF] ビューを使用します。これらの従来のビューを使用してタスクを作成するには、cmx.e360.match_xref.view.enabled を false に設定します。バージョン 10.2 にアップグレードすると、cmx.e360.match_xref.view.enabled はデフォルトで false になっています。

既存のマージタスクはどのように処理されますか？

バージョン 10.2 より前に作成されたすべてのマージタスクは、従来の [一致] ビューで開かれます。エンティティ 360 フレームワークを有効にすると、バージョン 10.2 で作成されたマージタスクは、エンティティ 360 フレームワークの [一致するレコード] ビューで開かれます。

マージ解除タスクはどのように処理されますか？

すべてのマージ解除タスクは、cmx.e360.match_xref.view.enabled の設定に関係なく、エンティティ 360 フレームワークの [相互参照レコード] ビューで開かれます。

レビュータスクはどのように処理されますか？

すべてのレビュータスクは、エンティティ 360 フレームワークのエンティティビューで処理されます。

ビジネスエンティティ ActiveVOS ワークフローアダプタを使用している場合、どのタスクインボックスを使用すればよいですか？

【ホーム】 ページの Informatica Data Director ユーザーインターフェースを設定する場合は、エンティティ 360 フレームワークのタスクインボックスを使用します。ビジネスエンティティ ActiveVOS ワークフローアダプタで従来のタスクインボックスを使用すると、エラーが発生します。

付録 A

用語集

- [用語解説, 35 ページ](#)

用語解説

business entity: **ビジネスエンティティ**

組織にとって重要なエンティティ。通常、組織は顧客、サプライヤ、従業員、製品、取引先を表すビジネスエンティティタイプを定義します。例えば、[Person] というビジネスエンティティタイプがあるとします。顧客 John Smith は、[Person] タイプのビジネスエンティティになります。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、サブジェクト領域はビジネスエンティティに置き換えられます。

business entity services: **ビジネスエンティティサービス**

MDM Hub コードを実行してビジネスエンティティのベースオブジェクトレコードを作成、更新、削除、および検索する一連の操作。Java コードまたは JavaScript コードを実行してビジネスエンティティサービス呼び出しを実行するカスタムユーザーインターフェースを作成できます。

business entity view: **ビジネスエンティティビュー**

ビジネスエンティティの圧縮バージョンを表すビュー。

Entity 360 framework: **エンティティ 360 フレームワーク**

ビジネスエンティティベースの Informatica Data Director (IDD)。エンティティ 360 フレームワークが有効になっている場合、IDD ユーザーは、マスターデータの編集および管理を [データ] ワークスペースではなくエンティティワークスペースから行います。

IDD Configuration Manager: **IDD コンフィギュレーションマネージャ**

サブジェクト領域のデータモデルに基づく Informatica Data Director アプリケーションを追加、変更、および管理するための Web ベースのユーティリティ。

lookup: **ルックアップ**

Informatica Data Director では、アプリケーションユーザーが選択できる値のドロップダウンリスト。通常、ルックアップ値は、ベースオブジェクトとルックアップベースオブジェクト間の外部キーを持つ物理ルックアップベースオブジェクトテーブルで定義されます。

Provisioning tool: **プロビジョニングツール**

ビジネスエンティティモデル、タスク、トランスフォーメーションを定義し、Informatica Data Director のユーザーインターフェースを設計するための Web ベースのユーティリティ。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、IDD コンフィギュレーションマネージャはプロビジョニングツールに置き換えられます。

reference entity: **参照エンティティ**

ルックアップベースオブジェクトに関連付けられているビジネスエンティティ。

Informatica Data Director のビジネスエンティティデータモデルでは、ルックアップはビジネスエンティティに置き換えられます。

subject area: **サブジェクト領域**

Informatica Data Director では、ビジネスパースペクティブの単位として扱うことができるデータの集合。